

オーストラリアにおける華人社会の変容 —シドニーおよびメルボルンの新旧チャイナタウンを中心に—

山下 清海*

キーワード：チャイナタウン, 華人, シドニー, メルボルン, オーストラリア

I はじめに

1770年, イギリス人のジェームズ・クック (James Cook) がシドニー付近に上陸して以来, オーストラリアはイギリスの植民地となった。1788年には, イギリスから流刑囚780人を含む約1,200人を乗せた第1次船隊がシドニー湾に到着した (竹田・森編 1998: 3-7)。

オーストラリアの開発のための契約労働者として, 1823~1825年, 中国人がオーストラリアに渡った。これら中国人の多くは, 厦門のイギリス領事によって募集された厦門周辺の福建人であった。当時, 厦門から香港を経由し, オーストラリア東南部まで木造船で約120日を要した (雷主編 1911: 9-19)。

カリフォルニアではシエラネバダ山中のコロマで, 1848年, 金鉱が発見されゴールドラッシュが起こった。中国の広東から一獲千金の夢を抱いた中国人も, 太平洋を横断し, 上陸地点のサンフランシスコを目指した。当時, 中国人はサンフランシスコを「金山」と呼んでいた。1851年, ニューサウスウェールズとヴィクトリアで金鉱が発見され, オーストラリアでもゴールドラッシュが起こった。ヴィクトリアのメルボルンは, 中国人から「新金山」, そしてサンフランシスコは「金山」に代わり「旧金山」と呼ばれるようになった (山下 2019: 74-77)。これらオーストラリアに渡った中国人移民 (以後, 華人と呼ぶ) の増加は, オーストラリアの白人優位の白豪主義につながっていった。

第二次世界大戦後, 労働党と自由党の二大政党制となったが, 1973年, 労働党政権は移民の人種差別条項を撤廃し, 長年続いて来た白豪主義は終わった。1975年には, 人種差別禁止法が制定され, オーストラリアは多民族・多文化社会の道を歩むことになった (谷内 2018: 1-7; 菊池 2017)。

1976年には, ベトナム人ボートピープルの第一陣がオーストラリアに到着した。ベトナム戦争やインドシナ

三国の社会主義化は, ベトナムだけでなく, カンボジア, ラオスからのボートピープルなどの難民のオーストラリアへの移住を増加させた (鎌田 1985)。これらインドシナ三国出身の移民の中には, もともと中国からインドシナへ移住してきた華人が多く含まれた。中国から海外へ移住し, さらに他の移住地へ再移住した華人は, 中国では「再移民」(remigration) と呼ばれる (山下 2019: 41-42)。オーストラリアのインドシナ出身移民の中には, このような華人再移民が多い。シドニー西郊のカブラマッタ (Cabramatta, 中国語名: 卡勃拉馬打) をはじめおもに華人再移民によって形成されたチャイナタウンが各地でみられる (山下 2000: 195-197)。

中国では, 1978年12月に改革開放政策を実施することが決定され, 1980年代半ば以降, 新たに海外へ移り住む「新華僑」(Chinese newcomer, 以下, 「華人新移民」と呼ぶ) が増えていった。オーストラリアでも, 中国大陸出身の華人新移民が増加した。

1984年の中国・イギリス共同声明により, 1997年の香港の中国返還が決定されると, 香港から海外への移住者が増加し, オーストラリアも香港人の移住先として人気があった。改革開放後, 特に2000年代以降の中国の急速な経済発展に伴い, 中国大陸出身の華人新移民も急増していった。国勢調査によりオーストラリアの総人口に占める中国大陸出身者の割合をみると, 2001年には0.8%であったが, 2006年には1.0%, 2011年には1.5%, そして2016年には2.2%に増加していった¹⁾。

オーストラリア統計局 (Australian Bureau of Statistics, 略称 ABS) は, 2018年の中国の春節に際して, 中国人人口の特色についてメディア・リリースを行った (2018年2月16日付)²⁾。これは, オーストラリアの華人人口に関する近年の特色を簡潔にまとめており, 以下に要点を紹介しよう。

オーストラリア居住者のうち中国人を先祖とする者 (Chinese ancestry) は5年前には387,420人であったが,

* 立正大学地球環境科学部

ABSの最新の推定によれば138,620人増加し、526,040人となった。中国人を先祖とする者は、過去20年間でイタリア、ベトナム、ギリシアなどを追い越した。2016年の国勢調査によれば、オーストラリアには120万人以上の中国人を先祖とする者が居住している。これらの出生地をみると、41%が中国大陆で、以下、オーストラリア25%、マレーシア8.0%、香港6.5%となっている。中国人を先祖とする者の46%は自宅で標準中国語（Mandarin）を話し、以下、広東語22%、英語18%が続く。宗教をみると、中国人を先祖とする者の54%は無宗教で、25%はキリスト教、15%は仏教を信仰している。中国人を先祖とする者の約半数は、2008年以降オーストラリアにきた者である。また、中国人を先祖とする者の44%はシドニー大都市圏に居住している〔以上、ABSのメディア・リリース〕。

オーストラリアは英語圏に属するため、オーストラリアへの留学を希望する中国人も、近年増加している。オーストラリアのデータによると、2019年の中国大陆部からオーストラリアへの留学生数は261,000人に達し、留学生全体の27.3%を占め国別で最多となり、2位のインドの2倍近くにのぼった³⁾。

以上、オーストラリアにおける華人の移民の時代的な流れと近況を概観した。オーストラリアの華人社会に関する研究の蓄積は少なく、なかでもその多くは華人の歴史的研究が中心となっている（澳大利ヤ華人総工会主編、2016；黄、1998；羅斯著、張訳、2017）。オーストラリアの華人に関する先行研究では、全国的スケールで考察したものが多く、各地域でホスト社会に華人がいかに適応してきたのか、具体的な様相を描いた研究は乏しいといえよう。

このような中、Inglis（2013）は、シドニーの市街地に形成されたオールドチャイナタウン（いわゆるシドニー・チャイナタウン）に焦点を当てながら、華人の郊外化についても考察している。また葉（2018）は、首都キャンベラを対象に華人社会の形成、地域的特色、華人社会と都市構造との関係などについて論究した。

これらを参考に本研究は、特に1970年代以降のオーストラリアの華人社会の変容とその要因について考察することを目的とする。筆者は世界各地の華人社会の地域性とその要因を究明するために、従来から形成されてきたチャイナタウン（以下、オールドチャイナタウンと呼ぶ）と、改革開放後、中国大陆から海外に渡った華人新移民の増加に伴い、主として郊外に形成されたニューチャイナタウンの比較考察を実施してきた（山下2016、

2019）。本研究においても、オーストラリアにおける華人の最大の集中地域であるシドニー（中国語名：悉尼）およびメルボルン（中国語名：墨爾本）における新旧のチャイナタウンの比較考察を行う。

本研究では、都市中心部のオールドチャイナタウンおよび郊外のニューチャイナタウン、これら新旧のチャイナタウンの土地利用、景観の特色、それらの要因の考察を、現地調査および中国語資料の活用などに重点を置いて行う。また、オールドカマーの華人とニューカマーの華人とのホスト社会への適応形態の差異を重視する。本稿では紙幅の関係から、両都市において最も代表的なニューチャイナタウンの事例として、シドニー郊外ではハーストビル（Hurstville、中国語名：好士園）、メルボルン郊外ではボックス・ヒル（Box Hill、中国語名：博士山）を主たる対象地域とした。

エスニック集団について考察する多くの研究の中で、地理学的考察の重要な特色は、エスニック集団の空間的構造の考察に重点を置くことである。オーストラリアは、エスニック集団に関する詳細な国勢調査データを利用することができる。堤は、これらの国勢調査データとGISを組み合わせた定量分析に多く取り組んできた。堤・オコナー（2008）は、留学生の増加と都心のコンドミニアムの賃貸需要との関連からメルボルンの都市再開発の特徴を論じた。オーストラリアの都市社会に関する堤編（2018）では、GISと各種統計資料を用いて、客観的・定量的な分析を行っている。作成されたシドニー大都市圏における標準中国語や広東語話者の居住分布図や、居住年数別にみた華人口の分布図などは非常に貴重な成果である。また花岡（2020）は、国勢調査データを用いて、近年のオーストラリアへの新規移民の居住地分布とその後の定住率について考察している。

2020年2月に実施した筆者の現地調査は、シドニーのオールドチャイナタウンおよびその郊外のニューチャイナタウンであるハーストビル、およびインドシナ出身の華人再移民が多く居住する郊外のカブラマッタ、そしてメルボルンでは、オールドチャイナタウンおよび郊外のニューチャイナタウンであるボックス・ヒル、およびインドシナ出身の華人再移民が多く居住する郊外のスプリングバール（Springvale、中国語名：史賓威）などで実施した。また、南オーストラリア州のアデレードのオールドチャイナタウンでも現地調査を実施した。2020年の現地調査以外に、1999年にはシドニーおよびメルボルンにおいて、また2012年にはシドニーにおいて、オールドチャイナタウンの予備調査を実施した。



図1 バララットの金鉱跡に造られたテーマパーク、ソブリンヒル

小川での砂金探しが体験できる。(1999年8月, 筆者撮影)

Ⅱ オーストラリアにおける華人社会の形成と変容

1. 華人社会の形成

中国人のオーストラリアへの本格的な移住は、1851年にニューサウスウェールズおよびヴィクトリアで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが起こって以降である。ニューサウスウェールズおよびヴィクトリアの金鉱には華人が多く居住し、白人による華人に対する差別、虐待などが高まっていった。1861年時点で、前者においては在留者の60%、後者においては25%を華人が占めた。1855年にはヴィクトリアにおいて、1857年にはサウスオーストラリアにおいて、中国人入移住制限が立法化された。その結果、新しい金鉱への華人の流入が制限され、特定地区への隔離などが行われた（イングリシ著、游監訳 2012：478-479）。

メルボルンの北西、約105kmに位置するバララット（Ballarat）のソブリンヒル（Sovereign Hill）には、金鉱跡地にゴールドラッシュ時代のバララットの街並みなどを再現したテーマパークがあり（図1）、当時の華人に関する展示もされている（図2）。

ゴールドラッシュの衰退、華人に対する差別の高まりなどにより、華人の中には中国へ戻る者も増え、1890年代のオーストラリアの不況では、さらに多数の華人が帰国した。オーストラリアの総人口に占める華人の割合は、1861年に3.3%であったが、1901年には1%未満に大幅に減少した。ゴールドラッシュ時代からオーストラリアに移住した華人のほとんどは単身の男性であった。1901年においても男女比をみると、華人の女性1人に対し男性は61.5人であった（イングリシ著、游監訳 2012：479）。

1901年、オーストラリア連邦（6州による）が結成されると、移民制限法が發布され、白人を中心とした国家



図2 ゴールドラッシュ時の華人の様子を表したソブリンヒルの展示

ゴールドラッシュ当時、中国は清朝の時代であり、華人男性は辮髪姿であった。
(1999年8月, 筆者撮影)

をめざすため、白人以外のオーストラリアへの移住を厳しく制限するようになった。

第二次世界大戦後、ヨーロッパからの大量移住が始まり、1970年代まで白豪主義が続いた。白豪主義が廃止される前の1971年、オーストラリアにおける華人人口（混血の華人を除く）は26,198人で、その1/3はオーストラリア生まれで、1/4が中国生まれ、残りの40%前後はアジア各地生まれであった（イングリシ著、游監訳 2012：480）。

2. 白豪主義後の華人社会の変容

1972年に労働党政権が誕生し、白豪主義政策が廃止されると、人種によって差別されない入移住・帰化政策が導入された。同じ1972年、オーストラリアと中国は国交正常化した。日本と中国との国交正常化が行われたのも同年であった。

1973年、非白人への法的差別が撤廃され、1975年には、人種差別禁止法が制定された。オーストラリアは、カナダに次いで多文化主義の公式政策を採用する国となり、その結果、アジアなどからオーストラリアへの移民が急増した。1975年には、パプアニューギニアの独立により、同地域に居住していた数千人の華人がオーストラリアに定住することになった（イングリシ著、游監訳 2012：480）。

ベトナム戦争が激化すると、アメリカ合衆国を支持するオーストラリアは、韓国、ニュージーランドなどと

もに、南ベトナムを援助するために地上軍を派兵した。1975年、ベトナム戦争が北ベトナム側の勝利で終結すると、オーストラリアは、ベトナムをはじめ、カンボジア、ラオスのインドシナ三国から、世界に先駆けて多数の難民を受け入れた。

これらインドシナ難民の多くは、中国からインドシナに移住した華人再移民であった。華人であるがために、社会主義化されるインドシナで迫害の危険性が高まり、命を懸けて家族といっしょにボートピープルなどとして、海外へ脱出せざるを得なかったのである。

オーストラリアへ移住したインドシナ難民は、特定の地区に集団居住する傾向をもつ。その代表例が前述したカブラマッタである。シドニーの中心部から西へ直線で約25km、電車で所要約50分のフェアフィールド市カブラマッタは、ベトナムを中心にカンボジア、ラオスのインドシナ出身者が多く住む地域である。カブラマッタ駅から続く整備された商店街にはベトナム語、カンボジア語などに加えて漢字の看板が多く見られ、「シドニー第二のチャイナタウン」とも呼ばれていた（図3）。駅に近い広場には、フェアフィールド市と地元の華人団体などにより、町の美化と観光促進のために、1991年に重厚な牌楼が建設された（図4）。牌楼建設のための寄付者名には澳洲華裔相済会、澳洲華裔老人会などが記載されている（山下 2000：195-197）。

メルボルンの南東郊外、約23kmにあるスプリングベール（Springvale、中国語名：史賓威）も、カブラマッタと同様にインドシナ三国出身の華人再移民の集住地域である。ショッピングセンターであるスプリング・セントラル（Spring Central）近くには、中国語を併記した看



図3 カブラマッタの商店街

商店の看板には、英語、中国語、ベトナム語、カンボジア語などが使用されている。
（2020年2月、筆者撮影）

板が多く見られ、牌楼も建てられている⁴⁾（図5、6）。

前述したように、1997年の香港の中国返還が決定されると、将来を不安視した香港人の海外移住熱が一挙に高



図4 インドシナ出身の華人の集住地区、シドニー西郊のカブラマッタ

牌楼には、孫文も好んでよく揮毫した「天下為公」（天下国家は君主の私物ではなく、公のためのものである）と書かれた扁額が掲げられている。
（2020年2月、筆者撮影）



図5 メルボルン郊外のインドシナ出身華人の集住地区、スプリングベールの牌楼

（2020年2月、筆者撮影）



図6 スプリングベールの牌楼（図5）に書かれた文字

牌楼の中央の扁額の「史賓威」と「SPRING VALE」の間に書かれた文字はカンボジア語。それらの下には左からベトナム語、標準中国語、カンボジア語、英語で「歓迎」と書かれている。
（2020年2月、筆者撮影）

まった。香港ではオーストラリアへの移住希望者が急増した。1991年から1996年の間、香港、中国大陆、台湾からオーストラリアへの移民が増え、マレーシア、シンガポール、インドネシアなど東南アジアからの移住者も流入し、それらの中には華人再移民も多く含まれた。1990年代に入り、オーストラリアの華人人口が増加するのに伴い、新たな華人の同郷団体なども多く組織されていった⁵⁾。一方、1997年の中国返還以後、香港の状況が比較的安定すると、オーストラリア国籍を保有しながら、香港に戻って経済活動を行う者も見られた。

Ⅲ シドニーにおける新旧チャイナタウン

1. オールドチャイナタウンの形成と変容

シドニー最初のチャイナタウンは、1900年頃、シドニー中心部の北側に位置するロックス (The Rocks) に形成された (図7)。イギリスからオーストラリアへの最初の移民船団は、ロックスに入港し、ロックスはオーストラリア発祥の地ともいわれる歴史的地区である。そ



図7 シドニー中心部

(<http://www.street-directory.com.au/> に筆者加筆により作成)

の後、チャイナタウンは、現在のチャイナタウンの北、約700mあまりのマーケット・ストリート (Market Street) 付近に移った。1920年以降、ディクソン・ストリート (Dixon Street) 周辺に中国料理店などが集中するようになり、現在地にチャイナタウンが形成されていった (Inglis 2013 : 98-103 ; 楊 2014 : 85-88 ; 梅主編 231-235)。1921年には、中国国民党駐澳洲総支部 (The Chinese Nationalist Party of Australia) が結成され、その会所は現在もチャイナタウンの中にある。

そのほか、チャイナタウンには、広東人の同郷団体である四邑同郷会が組織され、北側の牌楼付近の建物には東莞公義堂、東増聯義堂、増城聯福堂、そして中華総商會が設立された。

シドニーのチャイナタウンは、CBD (中心業務地区) の南に隣接している。シドニー市役所のタウンホール (Town Hall)、貿易港を再開発し観光地区になったダーリングハーバー (Darling Harbour)、シドニー中心の駅、セントラル (Central) を三角形に結んだ中心に位置するヘイマーケット (Haymarket) 地区にチャイナタウンが形成されている (図8)。チャイナタウンの西に隣接して「誼園」(Chinese Garden of Friendship) と呼ばれる中国庭園がある。

シドニーのチャイナタウンには、メインストリートのディクソン・ストリートの南側と北側に二つの牌楼が設立され、チャイナタウンのシンボルとなっている (図9, 10)。シドニー市はディクソン・ストリートを正式にチャイナタウンとすることを承認し、1979年、これら二つの牌楼が建設された。翌1980年、チャイナタウンの落成式典が催された (黄 1998 : 270-272)。

これら二つの牌楼間の距離は約165mであるが、そこに中国料理店やフードコートが集中しており、多数の観光客でにぎわっている。

しかし、チャイナタウンはこのディクソン・ストリートの区間だけではない。ディクソン・ストリートの東側を平行に通っているサセックス・ストリート (Sussex Street) にも華人経営の店舗が多くみられる。北側の牌楼近くには、観光案内所が設けられている。チャイナタウンは、そこからさらに北へ伸びている。この付近の中国料理店の客には、シティホール近隣のオフィス街に隣接し、昼食や夕食時には、オフィス街で働いている非華人も多く訪れる。なかには、若者向けの大衆的な中国料理店も目立つ。ここから西に進むと、シドニーでもっとも重要な観光スポットの一つであるダーリング・ハーバー (Darling Harbour) がある。

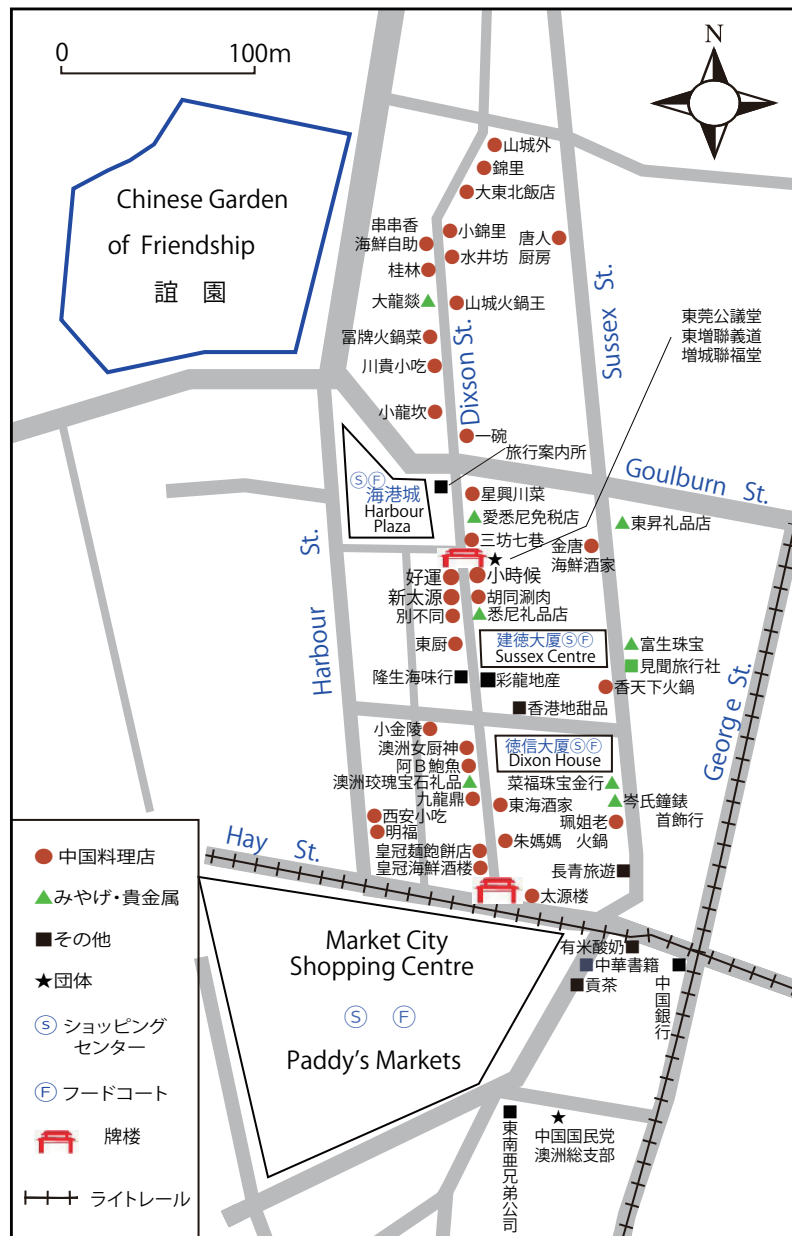


図8 シドニー中心部のチャイナタウン

(2020年2月の現地調査により筆者作成)



図9 シドニーのチャイナタウンの牌楼（南側）

(2020年2月，筆者撮影)



図10 シドニーのチャイナタウンの牌楼（北側）

(2020年2月，筆者撮影)

ディクソン・ストリートには、規模が大きいものだけでも3つのフードコートがある。最もにぎわっているのはサセックス・センター（Sussex Centre, 建徳大厦）のフードコート「建徳大厦美食中心」である。フードコートには一般の中国料理のほかに、マレーシアやシンガポールで人気のあるニョニャ料理⁶⁾のラクサ（laksa）専門店もある。おそらく経営者はマレーシア出身の華人再移民と思われる。

南側の牌樓の前のヘイ・ストリート（Hay Street）には、ライトレールのパディーズ・マーケット（Paddy's Market）駅がある。この通りに面するマーケット・シティ（Market City）は、大規模な駐車場を備えたショッピングセンターであり、周辺各地から自家用車で来訪する華人が多い（図11）。ショッピングセンターの中には、華人経営の大型のスーパーマーケット「泰記（Thai Kee）」があり、中国、東南アジアなど各地から輸入した食料品、生活用品など、シドニー在住の華人が必要な物品が取り揃えられている。マーケット・シティの中には、中国、東南アジア各地の様々な料理を味わうことができるフードコートがあり、観光客の姿も多くみられる。また、マーケット・シティの中にあるパディーズ・マーケットでは、生鮮食料品、衣類、電化製品、小物などが低価格で販売され、土産品を売る店もあり多数の観光客も訪れる。

牌樓のあるディクソン・ストリート周辺の店舗の多くは、おもに観光客向けであるが、チャイナタウンの店舗の中には、中国書籍を扱う書店、不動産（地産）会社、中国銀行など現地在住の華人を対象とした店舗・施設もある。

1999年および2012年にシドニーのチャイナタウンの予備調査を実施した時に比べ、ライトレールを東に進んだ



図11 シドニーのチャイナタウン南側のマーケット・シティ
(2020年2月, 筆者撮影)

セントラル駅周辺にも華人経営の中国料理店、各種店舗が増加し、チャイナタウンと接続するようになってきている。これは、シドニーに來住する中国大陸出身の華人新移民や東南アジア出身の華人再移民の増加を反映していると考えられる。

2. 郊外におけるニューチャイナタウンの形成—ハーストビルの事例—

シドニーは、オーストラリアに移住する華人にとって最も人気のある都市である。移住して來た華人の多くは、生活環境と経済的状况を考慮して、シドニー郊外に居住する者が多い。その代表的な例の一つがハーストビル（Hurstville, 中国語名：好市圍）である。ハーストビルは「シドニーの南のチャイナタウン」あるいは「小香港（Little Hongkong）」とも呼ばれてきた。シドニー中心部から南西に直線で約14km, セントラル駅から電車で約30分のところに位置する（図12）。

ハーストビルは、シドニー中心部より家賃も物価も安く、華人とくに中国大陸出身者に人気の高い居住地である。ハーストビル駅構内にあるショッピングセンターの客の多くは華人である。

華人にとってハーストビルがシドニーの住宅地域としていかに人気があるのかを、最も代表的なオーストラリアの中国語新聞の一つである「澳洲新報」（Australia Chinese Daily, シドニー発行）のニューサウスウェールズ州の広告欄でみてみよう。筆者が現地調査の際に購入（オーストラリア\$1.30≒104円, \$1≒80円）した2020年2月22/23日版（土・日版）の賃貸住宅の広告には、計168の物件が掲載されていた。その中で、ハーストビルが23件で、地区別にみて最も多かった⁷⁾。

2016年の国勢調査⁸⁾でハーストビルの総人口は29,822人であったが、先祖をみると、「Chinese」がシドニー大都市圏では10.1%であったのに対し、ハーストビルでは5倍あまりの55.0%（16,240人）と高い値を示した。2011年の国勢調査に比べると、わずか5年間でハーストビルの「Chinese」は2,812人増加した。続いて出生地（birthplace）をみると、シドニー大都市圏では中国大陸出生が4.7%であったのに対し、ハーストビルでは8倍近い36.9%であった。以下、多い順にみていくと、オーストラリア出生が27.8%で、ネパール出生が7.1%、香港出生が4.0%であり、ネパール出身者のハーストビルへの集住も注目される。さらにハーストビルでの家庭での使用言語をみると、英語のみが18.1%であったのに対し、英語以外では、標準中国語が32.3%、広東語が17.9%で

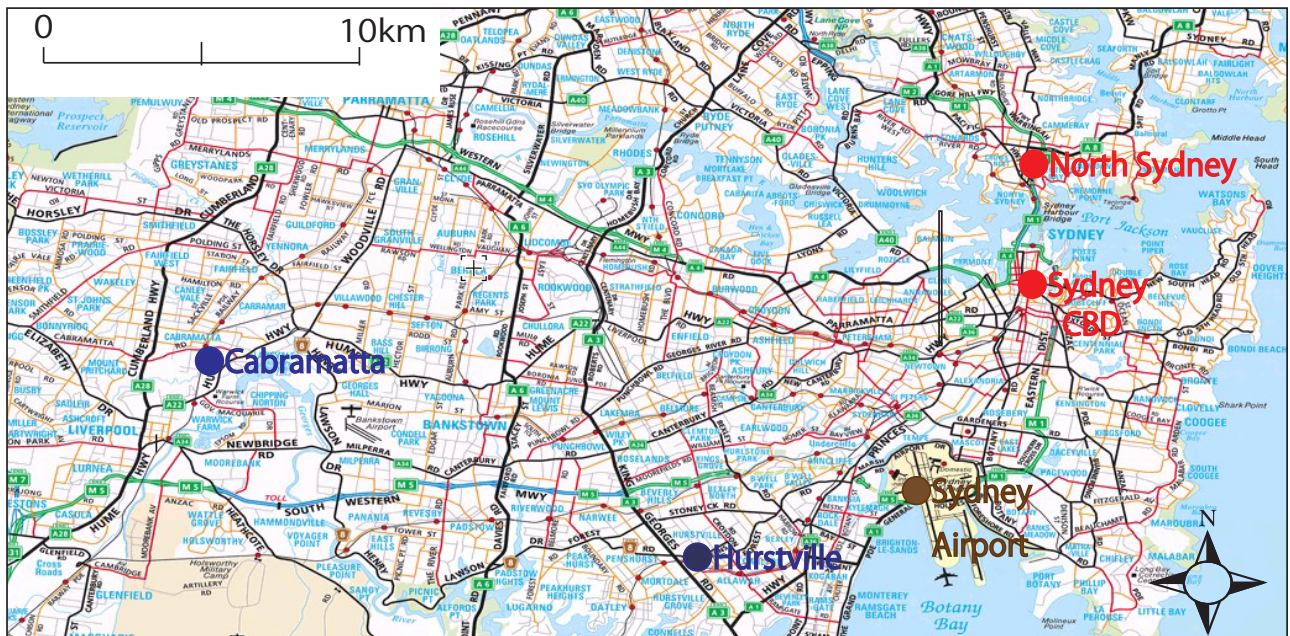


図12 シドニー郊外

(<http://www.street-directory.com.au/>に筆者加筆により作成)

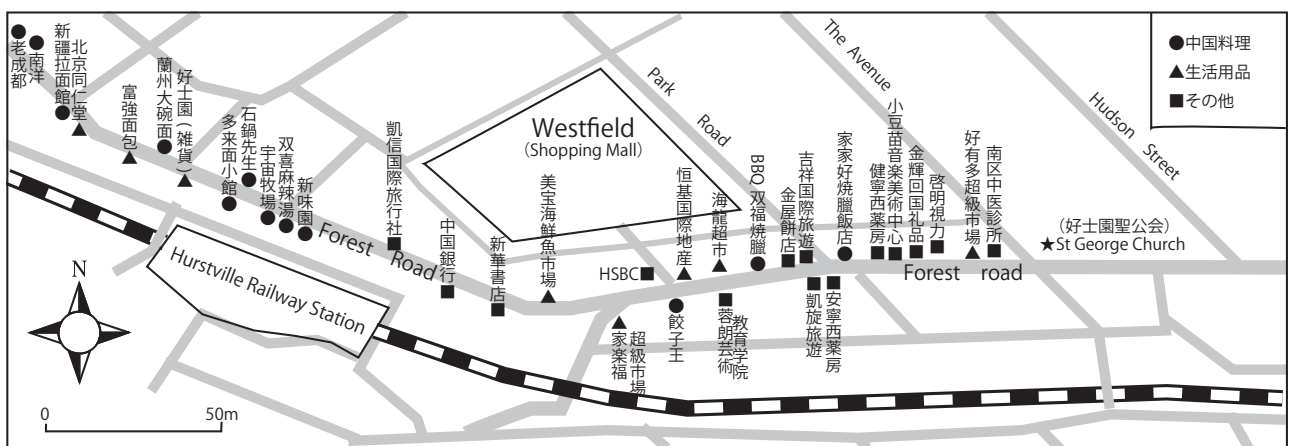


図13 シドニー南郊、ハーストビルのニューチャイナタウン

(2020年2月の現地調査により筆者作成)

あった。広東語話者の多くは香港出身者である。

ハーストビル駅の北側のメインストリート、フォレスト・ロード (Forest Road) に面したほとんどの店舗は華人経営で、まるで中国国内の街を歩いているような感覚になる (図13)。通行人の多くも華人で、標準中国語や広東語などの中国語の方言を話している。ハーストビルの駅前商店街に相当するにぎやかなフォレスト・ロードの両側には、多数の中国料理店をはじめ、華人経営のさまざまな店舗が軒を連ね、中国銀行やHSBC (旧称「香港上海銀行」) もある。ハーストビル駅の北側には大型のショッピングセンター「ウエストフィールド」(Westfield) があり、華人経営の店舗が多数入っている。その中には、中国でも人気の高い日系の「ユニクロ」も

ある。

郊外に形成されたニューチャイナタウンには、家族連れが多く居住するが、それを反映して、子どものためのSTC精英補習中心 (中国語の「中心」はセンターの意味)、C2C補習中心などの学習塾、英語塾などが多くみられる (図14)。中国語書店で販売されている書籍で最も目立つのも、子ども用の学習参考書である。そのほか、不動産会社、帰化申請などを取り扱う法務事務所、医療クリニック、美容院など、観光地化したオールドチャイナタウンとは異なるさまざまな生活関連の店舗が多い。

フォレスト・ロードを東に進むと、キリスト教の教会 ST George's Hurstville Anglican Church of Australian (中国語名: 好市園聖公会) がある。日曜日には、午前



図14 ハーストビルの商店街における中国料理店、中国語学校、学習塾などの看板

(2020年2月、筆者撮影)

9:30から広東語で、午前11:00からは標準中国語でミサが行われている。北アメリカ、ヨーロッパでも同様であるが、オーストラリアでもキリスト教徒になる華人が多く見られる。

IV メルボルンにおける新旧チャイナタウン

1. オールドチャイナタウンの形成と変容

メルボルンのチャイナタウンは、シティー・サークル・トラム (City Circle Tram) と呼ばれる路面電車で

囲まれた長方形の中心市街地の中に位置している。ビジネス街のパーク・ストリート (Bourke Street) には、高層のオフィスビルが多く建ち並び、昼休みには大勢の会社員などが昼食のために街に繰り出す。そのパーク・ストリートに平行しているリトル・パーク・ストリート (Little Bourke Street) に沿ってチャイナタウンが形成されている (図15)。

1950年代、リトル・パーク・ストリートに華人が居住する複数のアパートが建設され、しだいに華人が多く居住するようになった。これに伴い、華人経営の料理店、商店などが増加し、華人の同郷団体なども設立された。メルボルン市は、1975年、チャイナタウンを観光地区にし、中国式の街灯や四つの牌楼を建設することを決めた (黄 1998: 272-274)。

筆者が予備調査で訪れた1999年当時、メルボルンのチャイナタウンのメインストリートであるリトル・パーク・ストリートは、自動車2台分の幅しかない一方通行の狭い道路であった (図16)。世界各地のチャイナタウンを視察してきた筆者は、当時のメルボルンのチャイナタウンは少し暗い印象をもった。しかし、しだいに華人経営の店舗が増えつつあるような方向性は感じとることができた。当時、すでに4つの牌楼が設立され、観光地としてのチャイナタウンの発展への地元の努力が認識で

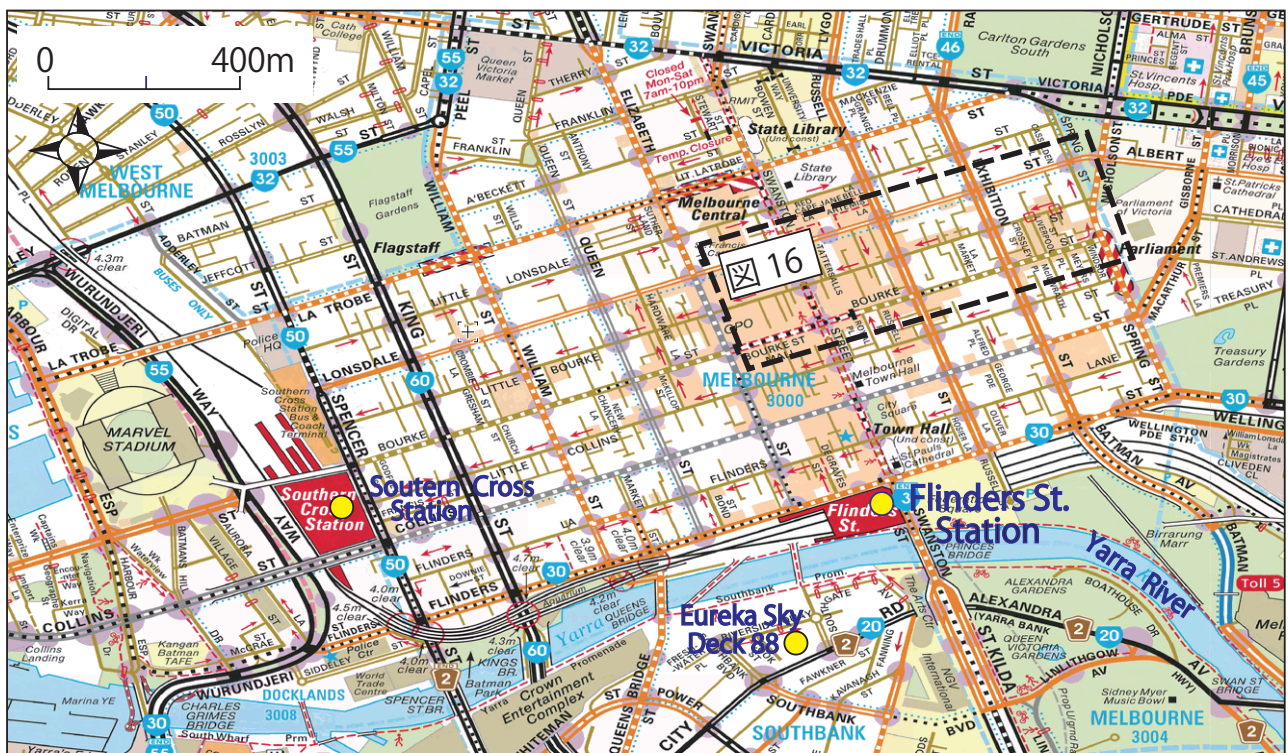


図15 メルボルン中心部

(<http://www.street-directory.com.au/> に筆者加筆により作成)



図16 メルボルン中心部のチャイナタウン
(2020年2月の現地調査により筆者作成)



図17 メルボルンのチャイナタウンの牌楼

リトル・パーク・ストリートには4つの牌楼が建てられている。(2020年2月、筆者撮影)

きたからである。

1999年当時、メルボルンのチャイナタウンは、まだ観光地としての重要性は高くなかった。日本の観光ガイドブックには、チャイナタウンがメルボルンの重要な観光スポットの一つとしては取り上げられていなかった⁹⁾。

筆者が1999年、初めてメルボルン・チャイナタウンを訪れたときに比べ、チャイナタウンはより賑わい、明るさを増していた(図17)。華人店舗も増加し、チャイナタウン内で写真を撮っている観光客の姿も目立つようになった。2020年の調査では、中国料理店だけでなく、韓国料理店、ベトナム料理店、日本料理店なども増加していた。ただし、メルボルンに限らず、各地のチャイナタウンの中で見られるほとんどの日本料理店は、筆者のこれまでの世界各地での調査に基づけば、華人経営の「借り傘戦略」と思われる¹⁰⁾。

リトル・パーク・ストリートと交差するスワンストン・ストリート(Swanston Street)の交界付近は、非常ににぎやかな地区で、特に若者向けの飲食店、テイクアウト店が多く、歩道は若者であふれている。そのすぐそばにチャイナタウンが隣接している。前述したように、各地のチャイナタウンに共通することであるが、メルボルンのチャイナタウンにおいても、中国銀行、HSBCの支店が設置されている。

メルボルンのチャイナタウンにある中国料理店の客層をみると、非アジア系の客も慣れた手つきで箸を用いて食事しており、オーストラリア社会に中国、東南アジア、日本、韓国などのアジア系の食文化が広く浸透していることがうかがえる。

リトル・パーク・ストリートに沿って、華人の伝統的



図18 リトル・パーク・ストリート沿いのメルボルン・チャイナタウンの伝統的な建築

右側の広場の奥に澳華歴史博物館(Chinese Museum)がある。(2020年2月、筆者撮影)

な地縁、宗教組織などである広東人の代表的な同郷組織である四邑会館、キリスト教の礼拝堂、福音堂など歴史的建造物もみられる。キリスト教会である華人聖公会の入口には、日曜のミサを英語、標準中国語、広東語の三つの言語で時間を変えて実施する案内が掲示されている。

リトル・パーク・ストリートの北側には、China Plazaと呼ばれる広場があり、その奥には、「澳華歴史博物館」(Chinese Museum)がある(図18)。地上3階、地下1階で、メルボルンだけでなくオーストラリアの華人社会の今日に至るまでの歴史、現状などを展示している。

2. 郊外におけるニューチャイナタウンの形成ーボックス・ヒルの事例ー

シドニーと同様に、メルボルンの郊外にも複数のニューチャイナタウンが形成されている。それらの中でも、ボックス・ヒルは華人が多く居住し、2019年には、オーストラリアで初の華人の女性下院議員がこの地区から誕生した¹¹⁾。

ボックス・ヒルは、メルボルン中心部のフリントマス・ストリート駅から東へ約14kmに位置する(図19)。メルボルンの郊外の住宅地域に形成されたのが、ボックス・ヒルのニューチャイナタウンである(図20)。

中国語の情報サイトでは、ボックス・ヒルについて次のように紹介している。「ボックス・ヒルの街を歩いていると、広州や香港の街を歩いているような感覚になり、小香港(Little Hongkong)とも呼ばれている。ボックス・ヒルに住んでいると、英語をまったく話せなくても、日常生活をおくることできる。鉄道の駅があり、地区内にはトラムが走り、買い物、食事でも便利な住みやすい



図19 メルボルン郊外

(<http://www.street-directory.com.au/> に筆者加筆により作成)

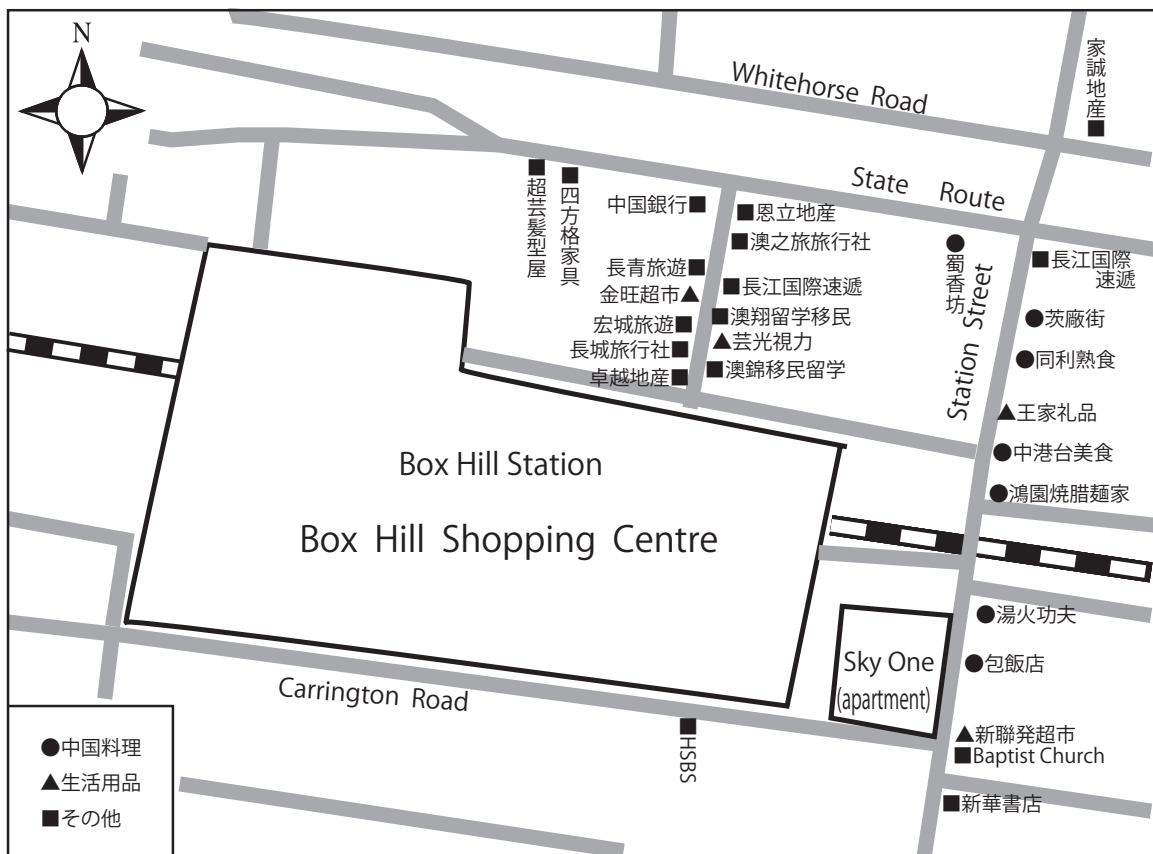


図20 メルボルンの東郊、ボックス・ヒルのニューチャイナタウン

(2020年2月の現地調査により筆者作成)



図21 ボックス・ヒル駅の北口
駅前に華人経営の不動産会社がある。
(2020年2月、筆者撮影)



図22 ボックス・ヒル駅北側の商店街の華人経営
不動産会社、旅行会社などの店舗
(2020年2月、筆者撮影)

地区である」¹²⁾。

2016年の国勢調査¹³⁾では、ボックス・ヒルの人口は11,395人で、祖先の出身地は中国が最も多く35.4%、イギリスが14.2%、オーストラリアが11.0%、アイルランドが5.3%、スコットランドが3.8%であった。出生地をみると、オーストラリア生まれが35.5%で、中国（香港・マカオ・台湾を除く）が27.6%、マレーシア4.8%、インド4.2%、香港3.0%などとなっていた。家庭での言語をみると、36.9%は英語であった。そのほか、標準中国語が28.3%、広東語が9.8%などとなっていた。

ボックス・ヒル駅は、“Box Hill Central”という名の広い駐車場を備えた大型のショッピングセンターの中にある。そこには、華人向けの各種商店のほかにフードコートもあり、自家用車で来訪し、買い物や食事をする華人が多くみられ、日系のDAISOも入っている。

ボックス・ヒル駅の北口を出てすぐに、中国人経営の不動産会社があり、通りの両側には、中国語の看板を掲



図23 ボックス・ヒル駅に隣接する高層マンション
ショッピングセンターに商品の搬送に来た
配送車の広告も中国語で書かれている。
(2020年2月、筆者撮影)

げた商店などが立ち並んでいる（図21、22）。

ボックス・ヒルには、比較的裕福な華人が多く居住し、駅周辺には、華人経営の不動産会社が多くみられる。不動産会社の店先には、高層マンションなどの物件を紹介する広告が目立ち、華人の不動産投資も盛んで、ボックス・ヒルは華人の新興住宅地という地域性を反映している。ボックス・ヒル駅の東側に隣接して、“Sky One”と呼ばれる高層マンションがあるが（図23）、その不動産広告には中国語が多く用いられている。

V おわりに

本研究は、おもに1970年代以降のオーストラリアの華人社会の変容とその要因を検討するために、オーストラリアにおける華人の最大の集中地域であるシドニーおよびメルボルンにおける新旧のチャイナタウンの比較考察を行った。

シドニーおよびメルボルンの中心部にあるオールドチャイナタウンは観光地化が進むとともに、増加する華

人へのサービス提供という役割も有している。チャイナタウンの内部も、中国大陸、香港、台湾出身の華人だけでなく、インドシナ三国、その他の東南アジア出身の華人再移民が増加し、オーストラリアの華人社会の多様化が進んできている。

華人人口の増加は、華人の居住の郊外化を促進し、ニューチャイナタウンを形成した。本研究では、郊外のニューチャイナタウンの事例として、シドニーに郊外のハーストビル、およびメルボルン郊外のボックス・ヒルを考察した。筆者が事前に予想した以上に、二つのニューチャイナタウンは、華人店舗が集中し、通りは漢字の看板が多数見られる。オールドチャイナタウンとは異なり、家族連れの華人が多く住むニューチャイナタウンでは、華人向けのスーパーマーケット、不動産会社、クリニック、美容院、法律事務所、子どものための学習塾などが多く、華人の生活関連店舗・施設が充実している。中国大陸出身の華人新移民および東南アジア出身の華人再移民も、このように生活しやすい郊外のニューチャイナタウンを求めて居住する傾向が認められる。

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究B（一般）「地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性に関する応用地理学的研究」（課題番号：17H02425、研究代表者：山下清海）の成果の一部である。

注

- 1) Australian Bureau of Statistics, Census. <https://www.abs.gov.au/census>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 2) ABS reveals insights into Australia's Chinese population on Chinese New Year, 16 February 2018 <https://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/mmediareleasesbytitle/D8CAE4F74B82D446CA258235000F2BDE?OpenDocument>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 3) 「オーストラリアでアジア系差別？中国教育部が留学検討者に注意喚起」人民網日本語版, 2020年6月11日。 <http://j.people.com.cn/n3/2020/0611/c94475-9699812.html>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 4) メルボルン市議会は、2014年6月、総額65万ドル（うち27万ドルは地元の団体が支出、当時オーストラリア\$1≒95円）を費やし、スプリングバールに牌楼を建設する（同年12月完成予定）と発表した。澳華財經在線ACBNEWS「墨爾本東南造中式牌楼 将建亚裔新聚居区」, 2014年7月1日 http://www.acbnews.com.au/html/2014/azjujiao_0701/10866.html（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 5) 福建省出身者の華人団体をみると、オーストラリア福建

会館（1982年成立）、オーストラリア龍岩同郷会（1988年成立）、オーストラリア福州同郷会（1994年成立）、ヴィクトリア州福建同郷会（1994年成立）、シドニー福清同郷聯誼会（1995年成立）などが相次いで組織された。また、2000年代に入ると、オーストラリア沙県同郷会（2001年成立）、オーストラリア永春同郷会（2004年成立）、オーストラリア南安同郷会（2003年成立）など、より小地域レベルの同郷組織も増えていった（中共福建省委党史研究和地方志編纂弁公室編 2020：108-111）。

- 6) ニョニヤ料理とは、マレーシアやシンガポールの華人が中国から持ち込んだ料理が、ココナツミルクを多用するなどマレー人の食文化の影響を受けて変容したものである。
- 7) ハーストビルの次に多かったのはキャンプジー（Campsie）で15件であった。キャンプジーは、シドニー中心部から南西に直線で約11kmに位置し、セントラル駅から電車で約35分である。
- 8) Australian Bureau of Statistics 2016 Census QuickStats https://quickstats.censusdata.abs.gov.au/census_services/getproduct/census/2016/quickstat/SSC11964?opendocument（最終閲覧日：2021年12月10日）、およびGeorges River Council, community profile, Hurstville (total) Ancestry <https://profile.id.com.au/georges-river/ancestry?WebID=310>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 9) 「地球の歩き方」編集室編（1999：223）の「メルボルンの歩き方」では、メルボルンのチャイナタウンに関して、次のように若干触れられていただけであった。「シティの中心部で、もうひとつ気に留めておきたいのがチャイナタウン。ショッピング・エリアとはスワンストン・ストリートを挟んだ反対側で、その規模はオーストラリア随一。中心街のリトル・パーク・ストリート沿いには数多くのレストランが軒を連ねている」。それから20年後に発行された「地球の歩き方」編集室編（2019：338）でも、チャイナタウンに関する扱いは、前書と同様の記述であった。
これに対して、シドニーのチャイナタウンは、「ダーリングハーバーとチャイナタウン」という観光スポットを設けて、より詳細に紹介されている（「地球の歩き方」編集室 2019：251-255）。
- 10) 海外のすし店経営者の多くが日本人経営でなく、また日本国内の「台湾料理店」が中国大陸出身者の経営であるように、よりマイナーな集団が、よりメジャーな集団の姿を借用する適応戦略を、筆者は「借り傘戦略」と呼んでいる（山下 2011：9）。
- 11) 朝日新聞デジタル, 2019年6月6日, 「94%が欧州系豪州選挙、壁に挑むアジア系に密着した」 <https://www.asahi.com/articles/ASM5W5QB7M5WUHB101V.html>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 12) 【Box Hill】墨爾本最著名的老牌華人區，興旺富裕的華人「第二家鄉」 2019年4月23日。 <https://www.getit01.com/p20190423659808178/>（最終閲覧日：2021年12月10日）
- 13) Australian Bureau of Statistics 2016 Census QuickStats

https://quickstats.censusdata.abs.gov.au/census_services/getproduct/census/2016/quickstat/SSC20312?opendocument#:text=In%20the%202016%20Census%2C%20there,up%200.1%25%20of%20the%20population. (最終閲覧日: 2021年12月10日), および City of Whitehorse, People of Chinese ancestry <https://atlas.id.com.au/whitehorse/chinese-ancestry> (最終閲覧日: 2021年12月10日)

参考文献

- イングリシ, クリスティーン (2012): オーストラリア, パン, リン編 (游 仲勲監訳): 『世界華人エンサイクロペディア』明石書店, 478-499.
- 鎌田真弓 (1985): インドシナ難民政策に見るオーストラリアの対東南アジア外交. アジア研究, 32(2), 72-101.
- 菊池一隆 (2017): オーストラリア華僑の歴史とその特質—アジア・太平洋戦争と関連させて. 愛知学院大学文学部紀要, 47, 186-210.
- 竹田いさみ・森 健編 (1998): 『オーストラリア入門』東京大学出版会.
- 谷内 達 (2018): 『地理的オーストラリア論』古今書院.
- 「地球の歩き方」編集室編 (1999): 『地球の歩き方④ オーストラリア 1999~2000年版』ダイヤモンド社.
- 「地球の歩き方」編集室編 (2019): 『地球の歩き方C11 オーストラリア 2019~2020年版』ダイヤモンド社.
- 堤 純, オコナー・ケヴィン (2008): 留学生の急増からみたメルボルンの変容. 人文地理, 60, 323-340.
- 堤 純編 (2018): 『変貌する現代オーストラリアの都市社会』筑波大学出版会.
- 花岡和聖 (2020): 近年のオーストラリアにおける新規流入移民の居住地分布—国勢調査資料を用いた分析. 立命館文学, 666, 82-101.
- 葉 倩瑋 (2018): キャンベラのエスニック・タウン—キャンベラにおける華人社会の空間構造. 堤 純編: 『変貌する現代オーストラリアの都市社会』筑波大学出版会, 116-133.
- 山下清海 (2000): 『チャイナタウン—世界に広がる華人ネットワーク』丸善.
- 山下清海 (2011): 借り傘戦略—外国人経営のすし店. 山下清海編: 『現代のエスニック社会を探る—理論からフィールドへ』学文社, 9.
- 山下清海 (2016): 『新・中華街—世界各地で<華人社会>は変貌する』講談社.
- 山下清海 (2019): 『世界のチャイナタウンの形成と変容』明石書店.
- 澳大利亜華人総工会主編 (2016): 『澳洲排華政策的歴史終結—公祭十九世紀排華騒乱中の死難者』黒龍江人民出版社. 哈爾濱.
- 黄昆華 (1998): 『澳大利亜華僑華人史』広東高等教育出版社, 広州.
- 雷鎮宇主編 (1991): 『澳洲華僑概況』正中書局, 香港.
- 羅斯, 艾瑞克著, 張威訳 (2017): 『澳大利亜華人史 (1800-1888)』中山大学出版社, 広州.
- 梅彬主編 (2015): 『世界唐人街』広東人民出版社, 広州.
- 楊永安 (2014): 『長夜星稀—澳大利亜華人史1860-1940』商務印書館, 香港.
- 中共福建省委党史研究和地方志編纂辦公室編 (2020): 『福建省志・華僑志 (1991-2005)』福建人民出版社, 福州.
- Inglis, Christine (2013): Chinatown Sydney: A window on the Chinese community. Wong, B. P. and Tan C. B. eds. : *Chinatowns around the world: Gilded ghetto, ethnopolis, and cultural diaspora*. Brill, Liden, 95-117.

The Transformation of Chinese Society in Australia : Focusing on the cases of old and new Chinatowns in Sydney and Melbourne

YAMASHITA Kiyomi*

* Faculty of Geo-environmental Science, Risscho University

Key words : Chinatown, ethnic Chinese, Sydney, Melbourne, Australia

